

Son of a witch 2

エクスカリバー(意味深)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

サノバウィッチ寧々√の続き的な奴です。他の√の内容も入る可能性が大いにありますのでサノバウィッチ全√プレイしていない方はネタバレ要注意です。

R-15にしていますが特にそういうシーンを書くつもりはないです。ただし用語等出る可能性はあります。

なろう でも投稿してます

目次

C h a p t e r	C h a p t e r
4 2	4 1
5	1

Chapter 4—1

寧々「今日は本当にありがとうございました。柀史君。」

ハロウィンパーティーからの帰り道の別れ際、まだ少し目の周りが赤い寧々が言った。ハロウィンパーティーでのサプライズで寧々は嬉しさのあまり涙を流していた。きつとそのせいだろう。

柀史「寧々はオレと再会する為に頑張ってくれたから、少しでもお返しがしたかったんだ。」

オレは何気無い口調で素直に思つた事を返す。

柀史「じゃあまた明日、学校で」

寧々「はい。また明日」

分かれの言葉を言つてそれぞれの家の方向に向かって歩き始めるオレ達。不思議な感覚だ。前のハロウィンパーティーの頃はお互い名字で呼び合つたのに今は恋人、同じ時間を生きているはずなのに違う関係を歩んでいる。そういえば寧々を意識し始めたのもこの頃だった気がする。

こうしてオレが寧々との思い出を懐かしみながら歩いていた時の事だった。

柘史「ん……？」

目の前から1人の男が歩いてくる事に気付いた。その男は黒いパーカーに黒いズボン、そして黒いフードを被っていた。姿勢も猫背でどこぞの探偵マンガの犯人のような印象を受けた。

柘史「……………」

変に見て絡まれるのも嫌なのでオレはなるべく見ないフリをしながらその男とすれ違った。

柘史「うツ…!!」

その瞬間今までに感じた事のない殺気と嫌悪感の味が流れ込んで着た。オレは吐きそうになるのを必死で堪えながら辺りを見回す。すると今すれ違ったはずの男の姿が見えなかった。

嫌な予感がした。

今までの人生の中で一番と言っていい程に嫌な予感がした。オレはすぐに携帯を取り出し吐き気も忘れて急いで寧々に電話をかけた。携帯の呼び出し音とオレの心臓の音だけが聞こえる。自分でも驚くほど冷や汗をかいているのが分かった。

頼む…!! 頼む出てくれ…!!

オレは必死で寧々が出てくれる事を祈った。

寧々『もしもし、どうしたんですか柘史君?』

携帯から聞こえた寧々の声に心の底から安堵した。緊張がとけた体からは力が抜けてその場に崩れそうになる。オレは汗を拭いながら会話を続ける

柘史「良かった…寧々…本当に良かった…」

寧々『柘史君…?』

柘史「寧々、突然で悪いんだけど今日家に泊まれないかな…?」

寧々『え…? いいいい今からですか!』

柘史「急な話でごめん…でも冗談とかじゃないんだ…今から迎えに行っても大丈夫かな…?」

その後寧々と無事再会したオレは安心のあまり寧々に抱き着きながら涙を流してしまった。寧々は最初こそ驚いたがオレのただならぬ雰囲気を受けて我が家に泊まる事を了承してくれた。

☆

男「今のが報告にあつた綾地寧々か。」

電柱の上で色々見せてもらったがどうやらあの抱きついていた男が綾地寧々の恋人の保科柘史らしい。それにしても…

男「あの保科柘史とかいう男…綾地寧々ほどではないが魔力を感じた。この俺の殺気

にも気付いた……」

「警戒心のない人間だと思っていたが訂正しよう。何しろこの俺は今まで一度も殺気を悟られた事が無いのだから。」

男「奴も魔女なのか……？それとも……」

t o b e c o n t i n u e d .

Chapter 4—2

———夢を見た。

夕焼けの中野原に黄昏ている2人の男女の夢を。

顔は見えなかったけど、どこか見覚えのある雰囲気はただただ静かに黄昏ていた。

ふと、女性が立ち上がり歩き出す。

「—————」

男がどこか聞き覚えのある声でその女性のことを呼び止めようとした。

その女は振り返ったけど、

それでも顔はよく見えなかった。

でもその女性は笑っていた。

その笑顔はどこか懐かしくて

そしてどこか安心する、

そして女性は再び前を向き、歩き出した。

そんな夢を見ていた。

☆

「ーきーーい。ーうーー」

「ーうーさでーよ。」

寧々「起きてください。柘史君。」

柘史「ん……？寧々……？」

どうして？と聞こうとして思い出す。そういえば昨日無理言つて泊まってもらったんだった。

柘史「おはよう寧々。昨日はよく眠れた？」

流石に同じ部屋で寝る訳にもいかず、親父が「もしかして父さん…今夜はどこかに泊まった方が良かった…？」なんて言い出したのでオレはリビングのソファで寝ることにしたのだ。

寧々「えっ…!? あっ…!! ハイ！昨日は部屋を貸してくれてありがとうございます柘史君！」

なんだろう…今一瞬綾地さんから甘酸っぱい味を感じたような…

寧々「そ、それより朝ご飯もうできてますよ！早く準備をしてきてください!!」

柘史「わっ?! ちよっ?! 寧々!?!」

寧々に背中を押され、無理やりリビングから出させられる。

柘史「なんだアレ…？」

オレは変な疑問を抱えながら朝の準備を始めるのだった。

☆

目を瞑り感覚を集中させる。

昨日感じた凍てつくような殺気は感じられない。

昨日のアレはなんだったのか。

勿論あそこまでの殺気を向けられる事に心当たりなんて…

海道「おはよう、柘史！綾地さん！今朝は一緒に登校？本日もアツアツで羨ましいねえ！」

…無いとは言い切れないか。

寧々と学校を抜け出してデートに行ったあの時以来多少なりとも嫉妬を受けてはい

る。
でも今まであそこまでの殺気を感じることもなくて無かった。

柘史「なあ海道。女を取られたからって殺したい程相手を憎むことってあると思うか？」

海道「殺したい程か…？さあ、分からないけどあるとしたらよっぽどその女の人の事が好きだったんじゃないかね？」

柘史「そうか…」

綾地「柀史君？何の話をしているんですか？」

柀史「いや、何でもないよ寧々。前に見たドラマの事を思い出しただけさ。」
帰りに少しあそこに寄ってみるか…

☆

柀史「こんにちは」

七緒「いらつしやい。おや…君は…」

放課後、オレは寧々を家まで送り届けた後シユバルツ・カツツエに寄っていた

七緒「今日はあの彼女は一緒じゃないのかい？」

柀史「ええ。今日は仮屋はいないんですか？」

七緒「ああ。今日は彼女は非番だ。もしかして彼女に用があつたのかい？」

柀史「いいえ。今日は貴方に用があつて来ました。」

七緒「私に？」

柀史「ええ。『アルプ』としての貴方に。」

オレは真剣な顔になって彼女に向き直った。七緒さんもそれを受けて真剣な表情になる

七緒「今日はもう店仕舞いにしよう。コーヒーで良いかい？」

柀史「はい。ありがとうございます」

七緒さんは店を閉め、静かにコーヒーを淹れていた。

柀史「気付いていますよね？オレたちのこと。」

七緒「ああ。君達からは少しだが魔力を感じた。君達はもう、契約を終えた魔女達なんだろう？」

七緒さんから嘘を付いているような味はしない。本当に覚えていないのか。まあ寧々と七緒さんが出会ったのは寧々の両親が離婚した後だから当然と言えば当然なのだが：

柀史「まあ、そんなところですよ」

七緒「どうぞ。冷めないうちに。」

柀史「ありがとうございます。」

七緒さんが淹れてくれたコーヒーを啜る。やはりいつも寧々が淹れてくれる味に似ているがオレには寧々の味の方が好みかな。

柀史「ご馳走様でした。」

七緒「おや、もう帰るのかい？」

柀史「はい。確認したいことはし終えたので。コーヒー美味しかったです。また来ます。」

御礼を言つて店を出ようとドアノブに手をかけようとしたがドアが一人で開き、外

から1人の男性が入ってきた

男「あれ？もう店仕舞い？」

男は如何にも黒！って感じの服に身を包みフードを被っていて顔はよく見えなかった

柘史「はい。今日はもう店仕舞いらしいですよ」

七緒「いや、良いんだ。その男は私の知り合いでね。」

柘史「そうなんですか。じゃあオレはこれで失礼します」

七緒「ああ。またのご来店を」

店を出て帰宅路に着く。本当はオレが寧々と出会う前に寧々を憎んでる人がいなかったかどうか確認したかったんだが、アテが外れたな…

☆

男「今のは？」

七緒「何、君には関係ない人間さ。」

男「ふーん。」

七緒「それで、君は何の用だ？」

男「ちよつと人を探してるんだ。綾地寧々っていう女の子んだけど、知らない？」

七緒「知らないな…？その女の子がどうかしたのかい？」

男「いやあ、そっちには関係ないことさ。じゃあ帰るわ」

男は聞くことだけ聞いて直ぐに帰って行った。

七緒「全く…せめてコーヒーの一杯でも飲んで行けば良いものを…」

七緒「綾地寧々…どこかで聞いたことがあるような…気のせいかな…？」